2021 年12 月 5 日 待降節第 2 主日礼拝メッセージ

「神は人の手を通して働かれる」　　牛田匡牧師

聖書 エレミヤ書　　36章 1－10節

12 月に入りました。陽も短くなりましたし、朝晩はすっかり寒くなりましたが、皆さんは如何お過ごしでしょうか。新型コロナウイルスの変異株として、デルタ株よりも更に新しくオミクロン株が登場して、世界中で警戒されています。また各地で地震があったり、なかなか心休まらない日々が続いています。ですが、そのような中でも、クリスマスはやってきます。

町のお店ではどこでもクリスマスのセールを行っています。コロナ禍で不況だからこそ、稼がないといけないということかもしれませんし、こんな暗い時代だからこそ、気分だけでも明るく楽しく盛り上げたいということかもしれません。神の子、救い主、イエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマスを皆が喜ばしい気持ちで迎えられることは、嬉しいことですが、最初のクリスマスがどのようなものであったか。神の子はどこに、どのようにお生まれになったのか、ということを思い起こし、今、嬉しい気持ちでクリスマスを迎えることの出来ない多くの人たちにこそ、目を向けていく必要があると思わされています。

今回の聖書のお話は、この聖書がどのように書かれ、作られたかということを垣間見ることが出来る珍しいお話です。今ではこのような一冊の本としてまとめられている聖書ですが、元々はバラバラの書物で、それぞれに執筆者がいて、また編集者がいて、さらにそれを書き写した人たちがいて、3000 年から 2000 年という長い時をつないできました。

預言者エレミヤは、紀元前 7 世紀から 6 世紀にかけて、南ユダ王国がバビロニアによって滅ぼされるまでの 40 年間にわたって預言活動を行った預言者でした。歴代の王や高官、神殿の祭司たちに対して、ヤハウェからの厳しい批判の言葉を投げかけたために、疎まれて、逮捕されて投獄されることもしばしばでした。今回の 36 章では、5節に「私は閉じ込められていて、主の神殿に入ることができない」とあります。詳しい状況は分かりませんが、どうも神殿への出入りを禁止されてい

たようです。

しかし、そのような状況にあったエレミヤの上に「私があなたに語ってきた言葉を残らず（巻物に）書き記しなさい」（2）というヤハウェの言葉がありました。巻物と言っても、当時はまだ紙がない時代ですから、パピルスか動物の皮をなめした皮紙でしたので、それらは大変高価なものでしたし、そもそも字を読み書き出来る人というのは、極一部しかおらず、それこそ専門職の人たちでした。ですが、丁度エレミヤの傍にはそのような技能を持ったバルクという協力者がいました。エレミヤはヤハウェに命じられた通り、自分が預言者として召命を受けた後、ヨシヤ王の治世から、今日のヨヤキム王の治世に至るまでの 20 年間の事を全て、バルクに口述筆記させました。

そしてバルクは巻物を完成させた後、エレミヤに命じられた通り、断食の日にそれをすべての民に向かって読み上げました（10）。「断食の日」というのは、当時は王の命令によって不定期で行われていたようですが、要するにエルサレムの都に多くの人が集まる日だから、その日にヤハウェの言葉を伝えなさい、ということだったのでしょう。この物語は、11 節以降も続いていきます。バルクからヤハウェの言葉を聞いた高官たちは驚き恐れて、「これらは王の耳にも入れなければならない」と思い、バルクから巻物を預かってヨヤキム王にも同じようにヤハウェの言葉を読み聞かせました。しかし、王はその言葉を聞いて「悪の道から立ち帰る」どころか、その巻物を火にくべて燃やしてしまいました（23）。

その報せを受けて、エレミヤもバルクもきっと落ち込んだことと思います。しかし、それで終わりではありませんでした。エレミヤは「もう一度別の巻物に書き記せ」（28）というヤハウェの言葉を受けて、バルクに再び巻物を口述筆記させました（32）。現代のような印刷機も、ペンも紙もない時代です。巻物自体も大変高価なものだったでしょうし、何より一度完成させたものを、すべて燃やされてしまったので、もう一度最初から作り直すというのは、時間と労力がかかるというだけではなく、気持ちの上でも大変なことだっただろうと想像します。しかし、そこで諦めてしまわなかったために、このようにヤハウェの言葉は、預言者の書として書き残され、今日（こんにち）にまで語り継がれ、読み継がれてきています。

このことは、単に書物、読み物としての巻物、聖書がどのように作られて来たか、

というだけではなく、そこに携わった数多くの人々一人一人の上に、紛れもなく神様からの力があった。神様からの助けがあったからこそ、巻物を完成させることが出来、それによって後代にまで読み継がれて来たのではないでしょうか。また、併せて覚えておきたいのは、ヘブライ語における「言葉」という語（ダーバール）は、単に「語った言葉」という意味だけではなく、「起きた出来事」という意味もあるということです。すなわち「神の言葉」「ヤハウェの言葉」という時、それは預言者に対して「このように民に向かって語りなさい」と言って下ったヤハウェの「セリフ」だけではなく、神が直接働いた出来事そのものも「神の言葉」として記されています。

ヘブライ語聖書は、この世界がどのように創られたか、という天地創造物語から始まっていますが、それも「神様はどんなセリフを語ったか」ということではなく、「この世界は神様によって創造された」というその物語全体が、神様の働きを表しているということなのだと思います。そのために、聖書は「神様のセリフ集」ではなく、物語の形をとって、この世界に、歴史の中で神様がどのようにかかわってきてくれているか、ということを、私たちに教えてくれています。

聖書の物語を読んでいると、天地万物の創り主であり、命の与え主である神様が、直接何かをする、ということも勿論ありますが、今回のエレミヤとバルクの話もそうだったように、神が人の手を通して歴史の中で働かれるということもたくさんあります。そして現代を生きている私たちの実感としては、人の手を通して神様の働き、神様が一緒にいてくださるということを、感じることが多いのではないでしょうか。なぜなら、神の言葉、神の出来事が、私たちと同じ肉体、人間となって、この世界にお生まれになった（ヨハネ　1：14）。クリスマスに生まれたイエス・キリストという出来事として、この世界にやって来られたからです。

私たちは毎年イエス・キリストの誕生を記念するクリスマスを祝います。しかし、改めて考えてみると、なぜ神が肉体を持った人間として、しかも、わざわざ弱く小さい赤ちゃんとして生まれたのでしょうか。しかも、王子様として大勢の人たちに歓迎されてお城に生まれたのではなく、旅の途中の寄留者、難民の子として、人知られず密かに家畜たちの隣に産み落とされて、寝かされていたのでしょうか（ルカ　2章）。赤ん坊は一人では生きていけません。そこにはイエス様の両親であったマリ

アとヨセフの存在がありましたし、また聖書には描かれていませんが、彼ら親子を助けた周りの人たちの存在もあったでしょう。

神が人間となったということ、神の子がわざわざ人間の手によってお世話される赤ん坊としてお生まれになったということ、これらのことは何を意味しているでしょうか。日々にたくさんの恵みを頂きながら、さらに「神様、〇〇してください」と願うばかりの私たちですが、クリスマスの出来事は、そんな私たちに、私たち人の手を通して出来ることがある、そこに神様が共に働いてくださる、ということを、改めて教えてくれているように思います。

神は人の手を通して働かれる……。クリスマスに生まれた「インマヌエル」私たちと共におられる神様を、どこか遠く空の彼方に探すのではなく、今日も神様からの命を頂いている私たちと共におられるということ、身近な人たちと私たちとの交わりの中に、神様も共に働かれるということに信頼して、私たちは今日も用いられていきます。